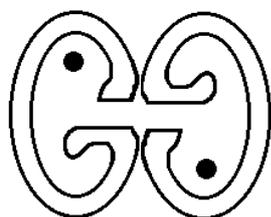


日本双生児研究学会ニュースレター

《第34号》



Newsletter of Japan Society for Twin Studies

2003年12月発行

目次

日本双生児研究学会第18回学術講演会プログラム	2
日時：平成16年1月24日（土）午前10時～午後5時	
会場：東京国際大学早稲田サテライト 大学院臨床心理学研究科5Fホール	
多胎児家庭に生じやすい問題と支援の必要性	横山 美江 6
(2003年11月15日, 第18回双生児研究会での講演記録)	
多胎児育児支援電話相談（ツインライン）について	天羽 幸子 10
谷口虎年先生のこと	浅香 昭雄 16
コロラド便り その2	安藤 寿康 18
平成15年度日本双生児研究学会第3回幹事会議事録	22
国際双生児研究学会（ICTS）のお知らせ	23
次回研究会のお知らせ	24
(日時：2004年5月頃（未定） 場所：慶應義塾大学三田キャンパス 講師：又吉國雄氏)	
編集後記	24

会員募集のお知らせ

入会を希望される方は郵便振替用紙に口座番号(00190-7-185311)、加入者名(日本双生児研究学会)をご記入の上、年会費(3,000円)をご送金下さい。また、通信欄に所属・所属の住所・電話番号・FAX番号・E-mail等をお書き添え下さい。

〒108-8345 東京都港区三田 2-15-45

慶應義塾大学文学部安藤研究室内

日本双生児研究学会事務局

電話：03-3453-4511〔内線23109〕

FAX：03-5427-1578

E-mail：juko@msa.biglobe.ne.jp

日本双生児研究学会 第18回学術講演会プログラム

日時：平成16年1月24日（土） 午前10時～午後5時

会場：東京国際大学早稲田サテライト 大学院臨床心理学研究科5Fホール

9:20 受付開始 (5Fホールロビー) 参加費 ¥1,000 (多胎児の親 ¥500)

10:00 開会の挨拶 第18回大会会長 詫摩武俊

10:05 ~ 10:50 一般演題(1) 座長 横山美江 (京都大学医学部保健学科)

- ① 多胎児の両親の育児役割の認識
平石皆子 (長野県看護大学)
- ② 当センターにおける多胎育児支援への取り組み
野口美和 藤田知子 米田和世 宮川祐三子 濱中拓郎 末原則幸
(大阪府立母子保健総合医療センター)
- ③ 不妊治療の光と影 (ベネフィットとリスク)
吉田啓治 (埼玉県東松山医師会病院)
- ④ 多胎児をもつ母親のニーズに関する調査研究 — 単胎児の母親との比較分析 —
横山美江 (京都大学医学部保健学科) 中原好子 松原砂登美 杉本昌子 小山初美
光辻烈馬 (西宮市保健所)

10:50 ~ 12:00 シンポジウム 座長 天羽幸子 (ツインマザーズクラブ)

「一卵性双生児にみられる差異について」

- ① 不一致一卵性双生児の分析によって何が得られるか? — その可能性を検討する
大木秀一 (石川県立看護大学健康科学講座) 浅香昭雄 (山梨県東病院)
- ② 双生児きょうだいが認知する経験の違い
— Sibling Inventory of Differential Experience (SIDE) の分析 —
前川浩子 (慶應義塾大学大学院社会学研究科)
- ③ 子どもの人格発達に関する発達行動遺伝学的研究から
菅原ますみ (お茶ノ水女子大学)
- ④ 指定討論
安藤寿康 (慶應義塾大学)

12:00 ~ 13:00 昼食

幹事会 (4F)

13:00 ~ 13:20 総会

13:20 ~ 14:20 一般演題(2) 座長 酒井厚 (山梨大学)

- ① ふたご観について — 日本国内とアジア、ドイツの比較 —
天羽幸子 (ツインマザーズクラブ)
- ② 算数・数学能力に及ぼす家庭環境の影響について
安藤寿康 (慶應義塾大学)
- ③ パーソナリティは遺伝的にも5次元か? — NEO-PI-Rの遺伝的・環境的構造の検討 —
山形伸二 鈴木敦命 高橋雄介 (東京大学大学院) 安藤寿康 (慶應義塾大学)

- ④ 社会的態度の家族内伝達 — 行動遺伝学的アプローチを用いて —
 敷島千鶴（慶應義塾大学大学院社会学研究科） 安藤寿康（慶應義塾大学）
- ⑤ 児童・思春期における双生児どうしの信頼感とネガティブ・ライフイベントおよび抑うつ傾向との関連
 酒井厚（山梨大学） 菅原ますみ（お茶ノ水女子大学） 眞栄城和美（白百合女子大学）
 菅原健介（聖心女子大学） 木島伸彦（慶應義塾大学） 天羽幸子（青山教育研究所）
 詫摩武俊（東京国際大学）

14:20 ~ 15:20 一般演題（3） 座長 大木秀一（石川県立看護大学健康科学講座）

- ① 健常成人における自閉症的傾向の個人差：双生児法による検討
 千住淳 國平揺（東京大学） 安藤寿康 大野裕（慶應義塾大学）
 長谷川寿一（東京大学）
- ② 三つ子死産率の動向、1975～1998年
 今泉洋子（兵庫大学健康科学部健康システム学科）
 野中浩一（和光大学人間関係学部発達学科）
- ③ ふたごの伝承（日本篇）
 又吉國雄（東京医科大学霞ヶ浦病院産婦人科）
- ④ 中高年双生児の食行動における遺伝・環境要因の検討
 加藤憲司・早川和生（大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻）
- ⑤ 東大附属高校卒業生の動向 — 過去3回の追跡調査を振り返って —
 大木秀一（石川県立看護大学健康科学講座） 佐々木司（東京大学保健管理センター）
 浅香昭雄（山梨県東病院） 岡崎祐士（三重大学医学部）

14:20 ~ 15:20 多胎児支援ワークショップ（4F 教室）

「多胎児育児支援グループを元気に続けるために」

15:20 ~ 15:30 休憩

15:30 ~ 16:20 講演（1） 座長 天羽幸子（ツインマゼースクラブ）

カイザー・ウィルヘルム人類学・人類遺伝学・優生学研究所と O. von Verschuer、K. Gottschaldt、
 上武正二、高木正孝 — 1930年～1945年頃のドイツにおける双生児研究 —
 詫摩武俊（東京国際大学）

16:20 ~ 17:10 講演（2） 座長 大木秀一（石川県立看護大学健康科学講座）

いま双生児研究から何がわかるか — ヒトゲノム時代の行動遺伝学研究について考える
 安藤寿康（慶應義塾大学）

17:10 閉会の挨拶 次期開催大会会長 志村 恵（金沢大学）

17:20 ~ 19:30 懇親会（地下1F） 会費 1,000円

* 発表は、一般演題が口演10分・質疑2分、シンポジウムが口演15分です。

* シンポジウムの予告 *

一卵性双生児にみられる差異について

座長 天羽幸子 (ツインマザーズクラブ)

今から 50 年前、東大附属中学校で、はじめて一卵性双生児 (MZ) の行動観察がおこなわれた。その結果 MZ 対間のはっきりした性格差異を目の前にした驚きを忘れることはできない。それまでとりあげられた参考文献には MZ は同じ遺伝形質をもっているの、「全く同じ」ということが強調されていたからである。このため東大教育学部としての最初の研究方向は MZ にみられる性格の違いに焦点があてられ、家庭でのきょうだいの扱い差と性格差との関連に向けられた。その後、ツインマザーズクラブをたちあげて 35 年、MZ の母親たちは身体的類似度に比べ、性格について「そっくり同じ」という人は、ほとんどいない。

近年、遺伝子の研究の発達が目ざましいが、全く同一の遺伝子をもつという MZ の存在にあらためて不思議さを感じ、研究的意義を考えて、今回「一卵性双生児にみられる差異について」というシンポジウムを企画した。これの裏づけのひとつとして考えて、ツインマザーズクラブの 19 歳以上の双生児 170 組を対象にしたアンケート調査を行い、それぞれが独立し、いわゆる「非共有環境」にいる双生児の母親の観察結果を回収した。共有環境といわれる同一家庭でのふたりの間の相互関係による対間の性格の交代性など興味深い結果を分析中である。

今回のシンポジウムでは、東大附属関係及びツインマザーズクラブを対象にして、身体的、運動的発達を中心に研究されている大木秀一氏 (石川県立看護大学)、慶應義塾大学双生児研究プロジェクトを対象にして、行動遺伝学の立場からさまざまな形質を研究されている前川浩子氏 (慶應義塾大学)、ツインマザーズクラブを対象に 2 年おきの縦断的研究によって、乳幼児の気質的特徴から、その後の家庭の中でみられる性格傾向や問題行動などについて研究されている菅原ますみ氏 (お茶の水女子大学) に話題提供をお願いした。

ただ論じるだけでなく、それぞれの研究から現在の時点であきらかになった結果に基づいて、「一卵性双生児にみられる差異について」話していただきたいと考えている。指定討論者としてアメリカ留学から帰国されたばかりの安藤寿康氏 (慶應義塾大学) に新しい目で論じてほしいと期待している。

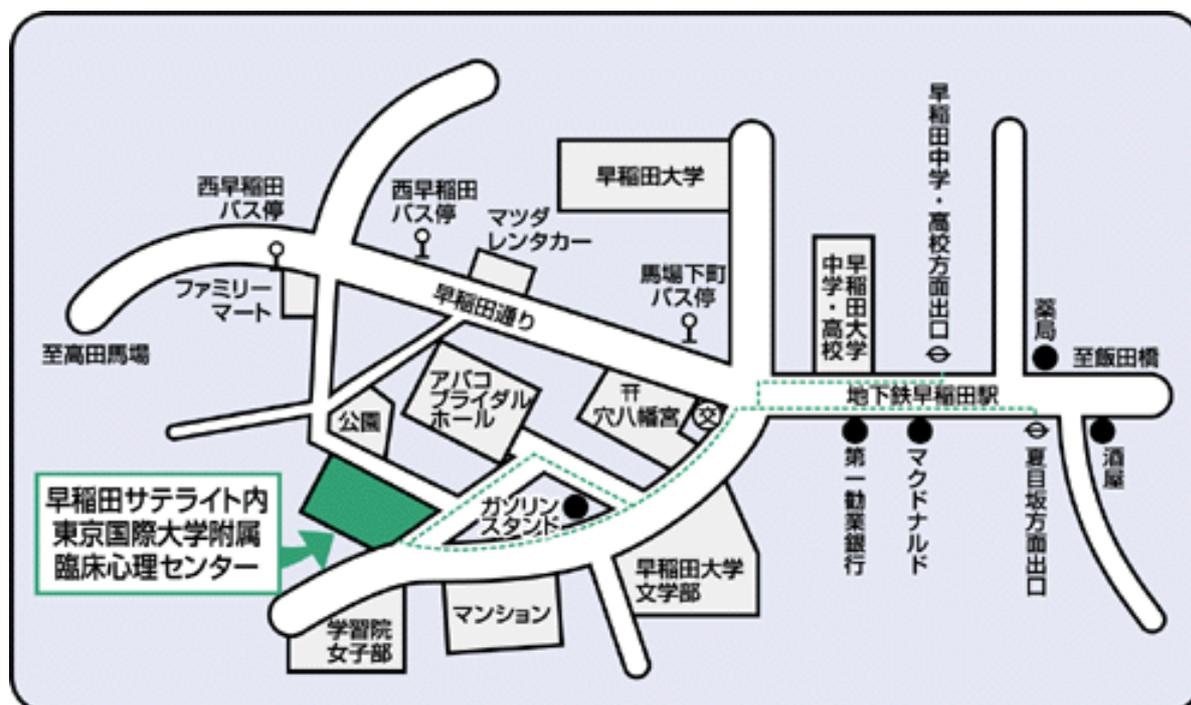
(今回一般発表の参加も多く、十分な時間を設定できなかったの、テーマでの質問などにあらかじめ出していただければ、それぞれの報告の中に取り入れたいと考えている。)



学会会場・交通のご案内

会場：東京国際大学早稲田サテライト 大学院臨床心理学研究科 5階ホール
〒169-0051 東京都新宿区西早稲田 2-6-1
(電話) 03-3205-7727 (FAX) 03-3208-7264

【会場案内図】



【交通のご案内】

- * 地下鉄東西線 早稲田駅下車 徒歩5分
(出口) 高田馬場寄り
(目標) 穴八幡宮
- * 都バス JR 高田馬場駅前より
早大正門行き乗車
「馬場下町」または「西早稲田」バス停下車 徒歩3分
- * 高田馬場駅より徒歩20分

多胎児家庭に生じやすい問題と支援の必要性

(第 18 回双生児研究会 2003 年 11 月 15 日)

京都大学医学部保健学科

横山 美江

はじめに

多胎妊娠は単胎妊娠より母体への影響も大きく¹⁾⁻³⁾、乳児死亡率も高いことが報告されており⁴⁾、多胎は母子ともに様々な危険にさらされている。さらに、出産後も多くの問題をかかえており⁵⁻¹⁶⁾、多胎児では幼児虐待の発生率も単胎児に比べかなり高い¹⁵⁾。今回は、多胎児家庭に生じやすい問題と支援の必要性を著者らがこれまで報告した論文を中心に報告した。

I. 単胎妊娠と多胎妊娠の比較

1) 子宮底長の変化

単胎妊娠では、妊娠末期になると子宮底長は 35cm に達する。これに対して、双胎妊娠では妊娠満 37 週で 40cm に達し、単胎妊娠の子宮底長に比べ約 5 cm 高くなる²⁾。さらに、品胎妊娠では妊娠満 36 週で 46~47cm に達し、単胎妊娠の子宮底長よりも約 11~12cm も高くなる²⁾。このように子宮底長の変化だけをみても、多胎妊娠は単胎妊娠よりも母体に大きな負荷がかかっていることは容易に想像できる。

2) 母体体重の管理

単胎妊娠では、母体体重の管理は妊婦ならびに胎児の健康維持のために重要であることが多くの研究から指摘されている。多胎妊娠においても、母体体重の増減は母児に対して影響を及ぼすことが判明している¹⁾。

しかし、多胎妊娠は胎児が複数であることや妊娠週数が短いことなどから、多胎妊娠における最適母体体重の増加量は単胎妊娠の増加量とは異なっており、しかも母親の妊娠前の体格と関連していることも判明している。多胎妊娠の母体体重に関する指導は、多胎妊娠独自の指標で指導する必要がある^{1),3)}。多胎妊娠中の妊婦に指導する立場にある保健関係者はこれらの情報を把握した上で指導に当たる必要がある。

3) 妊婦の心理面での比較

著者らの調査では、妊娠が分かったときに殆ど嬉しくなかった、あるいは全く嬉しくなかったと答えた者は、単胎児の母親では 1.6%であったのに対し、双子の母親、ならびに三つ子の母親ではそれぞれ 20%近くの母親が多胎妊娠を知ったときに殆ど喜びを感じなかったことが明らかとなっている。

さらに、妊娠を知ったときの不安の程度については、単胎児の母親では非常に不安、あるいは不安と回答した者は24.9%であったのに対し、双子の母親では57.0%、三つ子の母親では66.7%が非常に不安、あるいは不安と回答しており、双子・三つ子の母親の半数以上が強い不安を感じていたことも判明している⁵⁾。妊娠時点から、多胎児の母親は妊娠した喜びを感じない者が2割近くおり、かつ不安が強い者が6割から7割に上っていることは、保健・医療従事者も留意すべきである。

II. 多胎出産後の育児問題の比較

1) 低出生体重

低出生体重児として出生する単胎児は5.6~7.0%であるが、双子では約50%、三つ子では約95%が低出生体重児として出生しており¹²⁾、三つ子はほとんどが低出生体重児として出生する。さらに、三つ子の24.4%、およそ4人に1人が1500g未満の極低出生体重児として出生することも判明している¹²⁾。

このように低体重で小さく生まれた児は母乳の飲みも悪く、母親に育てにくい子として認識されやすい。

2) 高い障害児の発生率と集積性

国際的に唯一出生人口に基づいた脳性麻痺のレジストリーを実施しているオーストラリアの調査¹⁶⁾では、単胎児の0.16%、双子の0.73%、三つ子の2.79%が脳性麻痺であったと報告している。著者らの調査においても脳性麻痺の発生率は、双子、三つ子ともオーストラリアの報告とほぼ類似した値を示している⁸⁾。四つ子以上の報告は国際的にみてもほとんど認められないが、著者らの調査では11.1%とさらに脳性麻痺の発生率が高くなっていた⁸⁾。

また、双子、および三つ子における障害児の発生には集積性が認められ、1組中1人が障害児であった場合、他児（多胎児）も障害が発生する危険性はさらに高くなる⁹⁾。このように多胎では障害児の発生率が高く、加えて複数の障害児が発生する危険性も高いため、多胎児家庭において障害児の問題は非常に深刻である。障害のある多胎児をかかえる母親は、健康状態も悪化しており¹¹⁾、障害のある多胎児をかかえる家庭には、さらなる公的サービスの拡充が望まれる。

3) 育児環境上の問題

1歳未満の双子をかかえる母親では睡眠時間が6時間程度、その半数が夜間2回以上起きており、三つ子の母親においては睡眠時間が5時間半程度で、夜間2回以上起きる者が約75%と、三つ子の母親はさらに重度の睡眠不足に陥っている⁶⁾。

乳児期の多胎児をかかえる母親の場合、このような睡眠状態の悪化が授乳等のために1年近く継続することもあり得る。さらに、6歳までの多胎児をもつ母親と6歳までの単胎児をもつ母親を比べても、多胎児の母親は単胎児の母親より睡眠状態が悪化していることが判明している⁵⁾。

4) 多胎児への偏愛と幼児虐待

多胎児は、単胎児よりも被虐待児になる危険が高く、多胎児は幼児虐待のハイリスクグループとして位置づけられてきた¹⁵⁾。わが国における双子の虐待では、双子双方に対する虐待よりもむしろ双子のどちらか一方の児のみを虐待する場合が大半を占め、しかもその加害者は実母がほとんどである¹⁵⁾。さらに、これらの一方虐待家庭では親の愛情の偏りが共通して存在していることが指摘されており¹⁵⁾、親の愛情の偏り、すなわち偏愛は一方の児への虐待へと発展する危険性を秘めている。

多胎児家庭における児への偏愛の発生にはさまざまな要因が関与するが、母親の健康状態の悪化、睡眠状態の悪化、および心身両面で疲労感が強い場合に生じやすい^{4),13),14)}。このような状態に陥ると、母親は一方の児を可愛がれないと感じると同時に、時には自分自身をも責め、思い悩むことも少なくない。幼児虐待へと至らしめないためにも、専門的知識を持った保健・医療・福祉関係者のサポートが不可欠である。

引用文献

- 1) 横山美江, 清水忠彦: 双胎・品胎妊娠における最適母体体重増加量の検討, 日本公衆衛生学会誌 46: 604-615, 1999
- 2) Yokoyama Y.: Fundal height as a predictor of early preterm triplet delivery, Twin Research 5: 71-74, 2002
- 3) 横山美江, 清水忠彦, 早川和生: 双胎妊娠の比較からみた品胎妊娠における妊娠経過の異常および児の出生時体重, 日本公衆衛生雑誌 42: 113-20, 1995
- 4) 横山美江編: 双子・三つ子・四つ子・五つ子のための母子保健と育児指導のてびき, 医歯薬出版, 東京, 2003
- 5) 横山美江: 単胎児家庭の比較からみた双子家庭における育児問題の分析, 日本公衆衛生雑誌 49: 229-235, 2002
- 6) 横山美江, 清水忠彦, 早川和生: 双胎, 品胎家庭における育児に関する問題と母親の疲労状態, 日本公衆衛生雑誌 42: 187-93, 1995
- 7) 横山美江, 清水忠彦, 早川和生: 双子, 三つ子における障害児の発生状況, 日本衛生学雑誌 49: 1013-1018, 1995
- 8) Yokoyama Y, Shimizu T, Hayakawa K.: Prevalence of cerebral palsy in twins, triplets and quadruplets, International Journal of Epidemiology 24: 943-948, 1995
- 9) Yokoyama Y, Shimizu T, Hayakawa K.: Incidence of handicaps in multiple births and associated factors, Acta Genet Med Gemellol 44: 81-91, 1995

- 10) 横山美江, 清水忠彦, 由良晶子, 他 : 多胎児をもつ母親の心身の疲労と育児協力状況, 日本公衆衛生雑誌 44 : 81-8, 1997
- 11) 横山美江, 口分田政夫, 木内ゆかり, 清水忠彦 : 障害児をかかえる双子家庭の育児環境と母親の疲労状態, 小児保健研究 46 : 603-609, 1999
- 12) 横山美江, 山城まり子, 大木秀一 : 三つ子の出生体重・出生身長に関連する要因, 日本公衆衛生雑誌 50 : 216-224, 2003
- 13) 横山美江, 清水忠彦, 早川和生 : 双子の一方の児に対する母親の愛情の偏りと育児環境上の問題. 日本公衆衛生雑誌 42: 104-12, 1995
- 14) 横山美江, 清水忠彦 : 多胎児に対する母親の愛着感情の偏りと関連要因の分析, 日本公衆衛生雑誌 48 : 85-94, 2001
- 15) Tanimura M., Matsui I., Kobayashi N. : Child abuse in one of a pair of twin in Japan, Lancet 336: 1298-9, 1990
- 16) Petterson B., Nelson K.B., et al. : Twins, triplets, and cerebral palsy in births in Western Australia in the 1980s, BMJ 307 : 1239-1243, 1993



多胎児育児支援電話相談（ツインライン）について

ツインマザースクラブ 天羽幸子

1月に開催された第17回日本双生児研究学会でシンポジウムの一つに参加し、長く続けてきた多胎児支援の電話相談の現状を報告した。

電話相談：ツインラインは1994年4月に開始した。そのきっかけになったのは、1992年、東京で第7回国際双生児研究会議が開かれた折、英国の多胎児支援組織（TAMBA）が、1年前にツインラインを設立した報告を聞いたことから始まる。TAMBAの場合、日中は多胎児相談をもっている病院が対応するが、夕方から夜にかけて協力者の家庭の電話を利用し、夜間に多い電話相談を受けるといったものであった。このような運動なら私たちにもできるのではないかとということで講師を招いて研修などを行い、2年後に発足した。

協力者として自主的に名のりて40人ほどの家庭の電話を使い、電話を受けられる曜日や時間を一覧表にして全会員に配った。しかし考えていたほど電話がかかることが少なかったため、協力者の子どもの年齢や性別、趣味や得意とするものなどの個人情報を開示し、電話をかける時に親しみを感じてもらえるようにした。しかし電話数はそれほど伸びなかった。

そこでこれは協力者の家庭の電話を使っているため時間的制限などあり、かけにくいのではないかと考えた。1997年1月、それまで天羽宅にあった事務局を外部に移し、そこでの活動も軌道にのったので専門職のメンバーも加わって、限られた曜日に事務局で電話相談を受けることにした。更に昨年7月より事務局がひらいている火曜、水曜、金曜、すべての日に対応できるようにした。

今回報告するものは事務局で受けた6年間の相談についてである。電話の内容は担当者が相談内容と自分の対応を1枚のカードにまとめて保存している。これを臨床心理を専攻した相原由香が1枚ずつ検討し、分類した。

<相談件数の動向>（図1）

発足して数年は期待していたほど相談件数は伸びていない。昨年からは事務局の活動日すべてに対応するようになったので徐々に増加している。近年一般的な電話相談の件数もふえていないようだが、メールなどは利用されているようなので、たとえ声だけであっても、直接言葉をかわすことに、若い人たちは抵抗を感じるのだろうか。

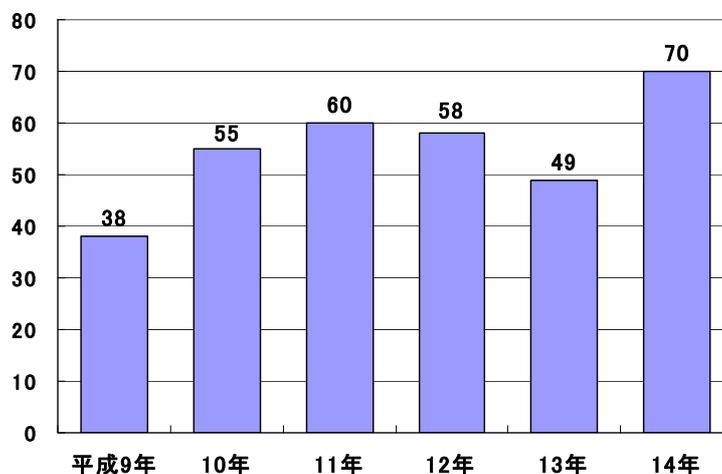


図1 年度別相談件数

＜相談内容について＞（図2）

相談内容を見ると、双子自身の問題、母親自身の問題、情報、しつけ、学校等の五つの領域に分けられた。双子及び母親自身の問題に関するもので60%をしめている。

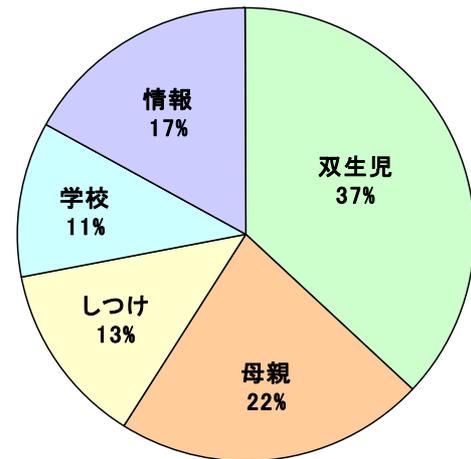


図2 相談内容について

1.双子自身について

A. 双子ペア間の差について（図3）

一番件数の多かった相談は双子自身についてで、その中でもふたりの間にみられる「差」についてが、もっとも多くとりあげられていた。

ふたごを育てる母親たちにとっては、ふたごが一卵性双子でなくても、ふたりは同時に生まれたものだから「似ているもの」という期待がある。それなのに、ふたりの間にみられる違いが大きくなると、これをそのままにしておいていいのだろうか心配になるようである。

これは電話相談ばかりでなく、私が出席する地区の集会でも、もっとも多い質問である。図3に示したように、ふたりの間に「力関係」ができ、その関係が固定しているもの、「発達差」「性格差」などが20%をこえている。最近男女のふたごの出生も多くなったので「男女差」についての問い合わせもふえている。

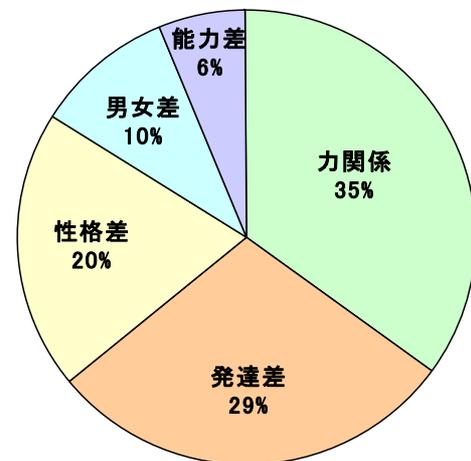


図3 双子ペア間の差について

B. 双子本人の問題（図4）

ふたごであることによって起こる問題では、ふたりの関係が仲がよすぎて、集団の中に入れても友達への関心が少なく、遊ばないというような「社会性」に関するものが36%をしめている。またこれとかかわりがあるが「言葉のおくれ」も24%みられた。

「競争意識」については18%みられ、5、6歳の年齢に集中し、ふたりの間の競争意識に限られ、他の友達との間の競争意識は少ないようである。

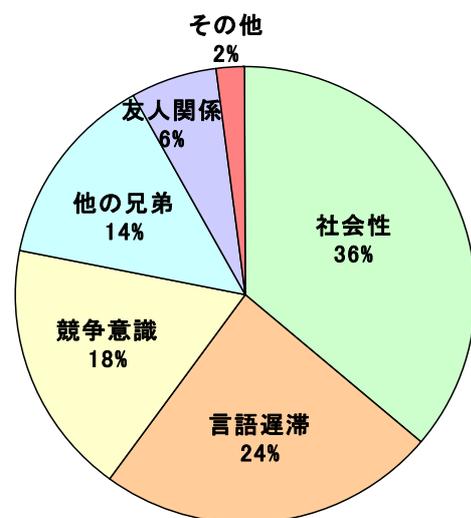


図4 双子本人の問題

2.母親自身について

A. 母親を中心にした問題 (図5)

相談内容の中で2番目に多かった母親にかかわる問題は「育児ストレス」「人間関係」「育児不安」にわけて考えた。ストレスの中に入れて考えることもできるが、特に人間関係が表に出てくるもの、またははっきりとした項目として取りあげられない漠然とした不安を「育児不安」として別に分類した。図5に示すように「育児ストレス」が44%みられた。

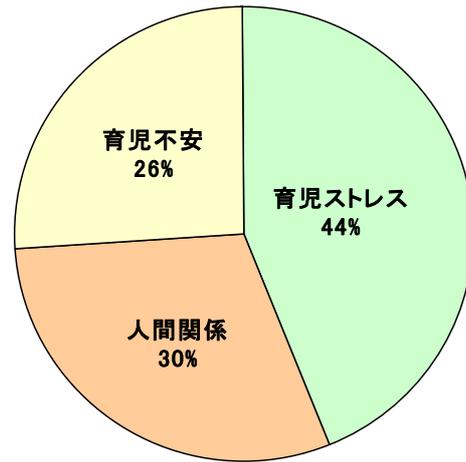


図5 母親自身の問題

B. 育児ストレスの年度別変化 (図6)

平成9年から14年までの6年間の変化をみていくと、人間関係、育児不安はそれほど変化がないが、育児ストレスは平成14年度に急増している。

C. 育児ストレスのふたごの年齢別発生率 (図7)

育児ストレスを訴える母親たちの子どもは何歳くらいが多いのであろうか。零歳、1歳、2歳が多く、これで育児ストレスの71%をしめている。やはりストレスを抱えるのは3歳未満に集中していることがわかる。

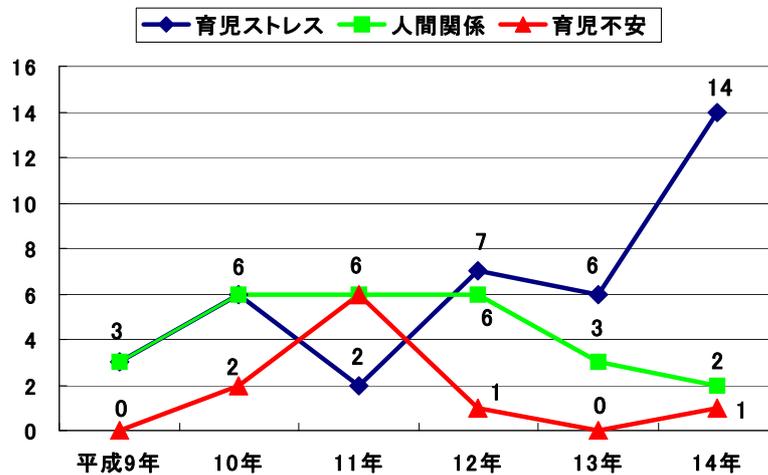


図6 育児ストレスの年度別変化

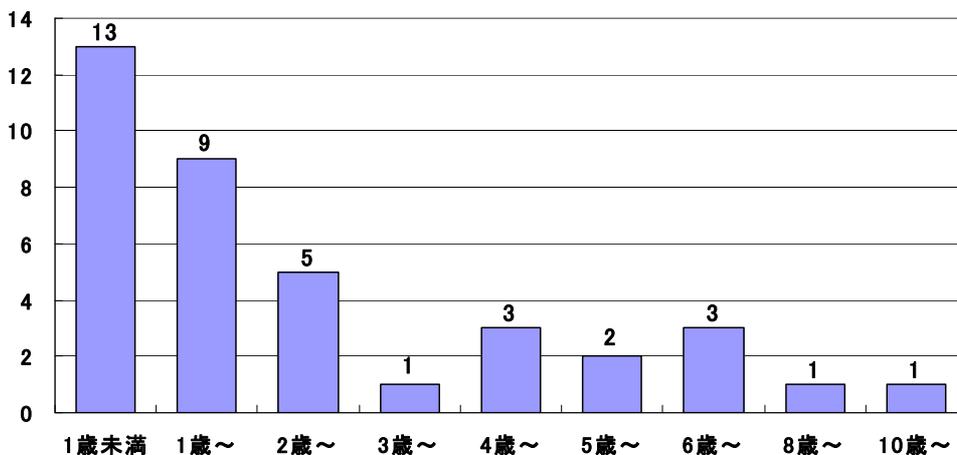


図7 育児ストレスのふたごの年齢別発生率

3.育児ストレスについて

多くあらわれる順に育児ストレスを並べると次のようになる。

- ① 慢性的疲労をかかえている
- ② ストレスになることが複数あり解決できない
- ③ イライラなど自分自身の行為がなさない
- ④ 限りなく続くこの忙しさがいつまで続くか
- ⑤ 男女のこどもの場合などどちらかを偏愛してしまう
- ⑥ 子どもと三人だけの閉ざされた世界が辛い
- ⑦ 子どもひとりだけの子育ては優雅にみえる

大きく分類して以上のようなものがストレスとしてあげられている。

慢性的疲労は「夜泣き」など睡眠不足から起きることが考えられる。

若い母親達も「ふたごの育児」は簡単でないという覚悟は或る程度もっているようだが、子どもたちがかわるがわる病気になったり、入院などということが重なってしまうと、追いつめられた状態になり、生活を立て直すことが難しくなるようである。

母親自身も自分がイライラして、子どもに手をあげてしまうことが、子どもにより影響を与えないということは十分理解している。朝起きた時は、今日はやさしいお母さんで一日過そうと考えている。しかし子どもの泣き声に追われているうちに、子どもを叩いてしまう自分の姿が情けなく、電話をかけながら泣いてしまう母親も少なくない。

4.人間関係にからむストレス

- ① 隣人、幼稚園の母親などに対して、言葉を交わすことが上手にできないと悩む
公園デビューなどで人と言葉でかかわることを変に意識してしまう場合も多く、ストレスを感じてしまう人も多いようである。「普通に話す」ことはできなくても、メールをおくることはできるのである。
私たちは人間の「普通の生活」を是非大切にしたいと考えている。
- ② 夫が原因となる場合は夫の側に未成熟が目立つ
母親は十か月近く自分のおなかの中に子どもを育て、徐々にお母さんらしくなっていくわけだが、父親の場合は或る日突然にという感じの人もあり、父親としての自覚が乏しく、母親にとっては頼りなくストレスの対象となっているようである。
- ③ 姑などでは、孫への偏愛が多い
人間関係で姑が原因というのはそれほど多くはなかったが、育て方の違いと子どもの一人の方をより多くかわいがり、かわいがられない方がそれに気づくようになったといううったえもあった。

5.情報・学校・しつけなどの相談内容

図2に示したように、全体の相談内容の中に、一般的情報・学校・しつけなどに関する電話があった。それぞれの項目の中で、どのような相談が、多くあったか拾い出してみる。しつけでは「食事」(37%)「睡眠」(26%)についてが多く、この二つで「しつけ」項目の60%をこえていた。

学校関係では「クラス分け」(33%)「不登校」(21%)これに続いて「学校選び」(22%)についても相談が多かった。

情報を求める項目では、特に近年多岐にわたる質問が多くなってきた。医療関係(25%)についてはともかくとして、生協の宅配情報とか法律相談などツインラインとして対応できにくいものがふえている。

<育児ストレスの電話への対応>

シンポジウムでの発表のあと、私たちは電話の受け手として「育児ストレス」と考えられる電話に対して、どのように対応しているかを調べたので、この結果を追加する。グラフにまとめてみたが、内容を事実通りに伝えてはいないように考えられるので、多い順に記述形式でまとめる。

1. 相談の内容を整理し、具体的な対応を話す

一気にうったえる感じの電話が多いので、こちらは短くあいづちをうちながら、話しやすい雰囲気を作る。

赤ちゃんの日常生活に関してなどは、ゆっくり聞いてあげて、それは特別に異常なことではなく、それに対応する方法として、こういう方法もあると具体的なやり方を並べる。一つの方法を無理に指示しない。

2. これから先の見通しを話す（ふたご育て。子どもの発達）

ふたごの赤ちゃんの育ち方などを話し、他の人もたいてい同じようなことで悩むとって、今後の見通しを話す。

またその年代の一般的な赤ちゃんの発達について述べ、多胎児の場合離乳の始める時期がおくられても、特に心配はいらないなどと乳幼児の発達についてのその後の変化などを話す。

3. 「よくやっている」と受容する

客観的にみれば、多少自己中心的なところが感じられても「いままでよくやったわねー」と、子育ての忙しさに共感し、まずは受け入れてあげることが必要に思われた。それによって、電話のかけ手の気持ちをやわらげ、本当にうったえたいことがあることもある。

4. 精神的、日常的な手抜きをすすめる

母親たちは全体的にまじめで、あれもこれもやろうとしてできないとおちこむことが多いので、そんなになんでも完璧にやろうとしないこと。赤ちゃんの健康と、自分自身の健康が一番大切で、他のことについてはこのような手抜きの方法があると伝えたり、時に父さんに子どもをあずけて、数時間でも好きなことをする機会が必要であるという。

5. ふたりを平等に扱うことや上の子へのかかわり

男女のふたごの出生がふえていることもあり、男の子の方がかわいく思えることが多いとったえ、「これは母親として異常なことか」などときく場合も多い。常にそのような扱い差が出ることは問題であるが、それを理解した上で、「子どもはいつも平等に」と心の中でとなえながら、その時に必要な人に接していくことになる。

上の子の赤ちゃんがえりから、お母さんのイライラが始まることも多いので、「王さまの座」をうばわれた上の子の気持ちを察して、「お母さんはあなたのことを忘れていない」ということを伝えることが大切である。



<ツインラインの受け手として>

私たちはツインラインを受けるものとして次のような点を基本的態度としてとることを考えている。

- ① 聞くことに徹する。
- ② 何を訴えたいか、整理して伝える。
- ③ 電話のかけ手自身が解決の方向に気づくように話を進める。
- ④ いくつかの解決が考えられる場合は、それを情報として伝える。
- ⑤ 専門職の協力が必要な場合は連絡をとる。

<まとめ>

- ・相談内容としては双生児間の違い、また育児ストレスに関するものがふえてきた。
- ・私たちは同じ育児体験をしたものとしてつねに共感をもって対応することが一番大切であると考えている。
- ・専門家の集団ではないので、自分の言葉で話し、相手の心の支えになるようになりたいと思っている。
- ・あなた一人でなく、気づかってくれる人がここにいるということを伝えることができればと思っている。
- ・相互に言葉をかわすことによって、メールとは違ってツインラインにかかわる人の暖かいまなざしを伝えられるように努力し、電話をかけてよかったという気持ちを持ってもらえればと思っている。



谷口虎年先生のこと

浅香 昭雄（山梨県東病院）

日本の双生児研究の歴史について調べていて、気にかかった人がいる。その谷口虎年先生について、少し紹介しておきたい。少しでも後世に伝えておきたい、というのはオーバーであるが、偽らざる気持ちでもある。

最近入手した①「谷口虎年先生の憶い出」（慶応義塾大学医学部解剖学教室編、非売品、258頁、昭和39年10月1日発行）に、その業績が記載されている。たくさんの論文、著書等があるが、手元にあるのは②「双胎の研究」1935 ③「遺伝・体質・混血」1939のみである。②③は大阪大学早川和生先生が蔵されていたものである。

調べた文献等は未だ限られており、今回は、学術的なことは他の機会に譲り、先生の人物像を簡単に素描してみたい。

①による先生のご略歴は以下のとおりである。明治35年6月14日千葉県に出生、昭和2年慶応義塾大学医学部卒業、昭和6年1月慶応大学医学部助教授、昭和10年10月より昭和11年12月まで欧米に留学（その間昭和11年4月9日岡嶋敬治教授逝去）、昭和12年3月慶応義塾大学医学部教授（解剖学教室勤務）、昭和28年5月第58日本解剖学会総会特別講演「双胎胎児の解剖学的研究、特に人類の正常及び異常形質の遺伝問題について」、昭和31年11月三鷹の自宅に於いて脳卒中の発作に襲われる、昭和38年3月11日慶応義塾大学病院において逝去、とある。

小川鼎三先生は、①のなかで「谷口虎年教授を追悼して」と題し、「あしあと——解剖学者の夢と現実」（谷口虎年著、昭和36年刊）より引用されている箇所がある。それは、「『悶々数年にして汗腺研究のかたわら、当時もっとも困難視されていた体質の研究に万難を排して専念することを決心した』とあり、それから氏の畢生の仕事である双生児の解剖学がはじまるのである」と、もう一箇所『著者は過去をかえりみることを好まず、もっぱら希望に満ちた未来のみを夢みることが好きであった。しかるに還暦が近づいた今日は過去を美化して考えるようになりつつある。大学3年のときにもっとも好まない解剖学の専攻を決心した。それは恩師岡嶋敬治教授の人となり慕ってのことであり、特に先生の教育に関しての高邁な識見に感激したからである』と、引用されている。

師に対する谷口虎年先生の気持ちの一端は、②の「はしがき」に、「本書を成るに及んで先づ、著者は学者として、恩師岡嶋敬治先生の双胎研究に対する絶えざる激励と鞭撻及び心ゆくまでに研究の自由を与へて下さったことに対して心からなる感謝の意を捧げたい」とある、ことから窺える。さらに、①のなかで、佐々木宗一先生（熊本大学名誉教授）は以下のように述べている。「谷口君は恩師のすべてをよく吸収しこれに自己の天分を加えて師の偉業を継承し更に発展させたのみならず自らの新分野に研究の鋏を入れ目覚しい収穫をおさめつつあった。而してその間一瞬も師に対する敬仰の念を忘れず先輩を尚び後輩を導き門下を養って居られた。これが私の君を遠くから眺めた全体観である。さて君の恩師岡嶋敬治教授は数え年二四で長崎医専教授となり日露戦役に軍医として応召して勲章を得、しかもその年金は別籍になっていた厳父の酒肴料として永く贈られたといふ様な人柄で、京都大学では三太郎随一の鈴木文太郎先生の落雷を一度も経験しなかった唯一の助手として有名であった。教授述懐の一つに『鈴木先生の手が解剖学教室玄関の扉を開けた音や助手室の天井から伝わる靴音で先生の心境推移がわかりました』と言ふのを感じている」と、ある。

さて、鈴木文太郎・岡嶋敬治・谷口虎年の師弟三代記の紹介になってしまった感があるが、時代的背景が影響しているのか、個々人の特有性に帰せられるのか、よくある話なのか稀有のこと

なのか、俄かに判断はつかない。が、羨ましい関係にあったと率直に思う次第である。最近は大ライナの方がよいのかも知れない。三尺下がって師の影を踏まず、とは昔の話か。「君子の交わりは淡きこと水の如く、小人の交わりは甘きこと醴の如し」というではないか。しかし、「君子の三楽」ともいう。出来のよい弟子を育てる事ほど、他に勝る悦楽はない、と言われている事も事実である。とくに、谷口虎年先生は、「研究よりは教育が大事」との考えがあったと、何人かの人が触れているが、最後の直接の死因は胃潰瘍からの吐血であった。この直前に、口頭試問があり、そのときの学生の出来がわるく、えらく怒っていたとの情報も記録されている。教育者のはしぐれであったものとしては、内心忸怩たるものがある。なお、岡嶋敬治先生は、岡嶋道夫先生の厳父でいらっしやる。

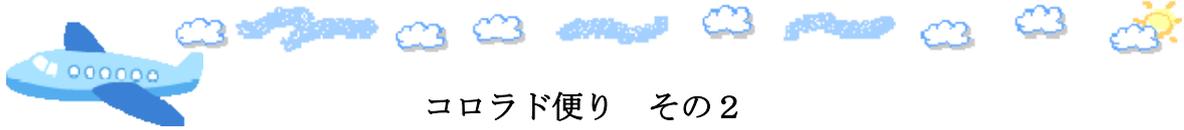
古畑種基先生、井上英二先生も、①に一文を寄せられている。古畑種基先生は、「博士はつとに人類の遺伝学に関心を持たれ、ライフワークであられる双生児の研究に着手せられましたのは、実に今より 30 年前にさかのぼるのであります。人類の遺伝学における双生児研究の重要性は今日何人もよく知るところであります。…昭和 30 年秋、日本人類遺伝学会創立の議が始まりますと、博士は創立準備委員として参画せられ、学会の誕生のために陰に陽に多大の力を尽くされました。殊に第 1 回大会の開催に当たりましては、進んで大会委員長をお引き受け下さったのであります。かくして日本人類遺伝学会は谷口博士のお力により昭和 31 年 6 月に呱呱の声をあげることができたのであります…」と述べている。

第 2 4 回日本人類遺伝学会の大会長は井上英二先生がお引き受けになり、第 4 3 回大会のお世話は小生が仰せつかった。何か因縁めいた回り合わせかとも思える。

今、日本双生児研究学会の事務局は、偶々慶応義塾大学にある。谷口虎年先生は喜ばれておられるのではないだろうか。

拙文を読み直すと、回顧趣味が紛々としている。老いてきていることの証左か。また、機会があったら威勢のよい文を寄せたいものだ。(03. 12. 4)





コロラド便り その2

安藤寿康 (慶應義塾大学)

コロラド・ボウルダーに雪がちらつく季節、そして 11 年前に初めてこの土地を訪れた季節になりました。留学期間も 2 ヶ月を切り、雪と一緒に、そろそろ帰国後のことも頭をちらつくようになってしまいました。

行動遺伝学研究所(Institute for Behavioral Genetics, IBG)に滞在してみて驚いたのは、夫婦で研究をしている人たちが非常に多いということでした。ボウルダーでの家探しに骨を折ってくださった副所長のトニー・スモーレン Toni Smolen さんは、旦那様のアンディー・スモーレン Andi Smolen さんといっしょに分子生物学的な研究をなさっています。昨晩は感謝祭 Thanksgiving のホームパーティにご招待下さり、アンディみずから焼きたてのおおきな七面鳥をナイフで取り分けてくださいました。そこには私たち含めて 3 カップルが集いましたが、その中の一組アラン・コリンズ Allan Collins 先生とジーン・ヴェーナー Jeanne Wehner 先生も IBG の研究者、特にアランは 1969 年からのメンバーということですから、ほとんど IBG の創立メンバーといってよい方です。

この夏いっぱいかけて私が取り組んでいたパーソナリティの遺伝構造に関する論文にアドバイスをくださったマイケル・ストーリングス Michel Stallings さんは奥さんのスーザン・ヤング Susan Young さんと研究室が隣どおし、またさきのコロラド便りでも少し触れましたが、こちらで行われている読み能力と数学能力の双生児研究をマネージしていて、そのデータを使わせていただいているサリー・ワズワース Sally Wadsworth さんも、旦那さんは動物の行動遺伝研究者で、よく彼女の研究室をたずねてきます。そういえば所長のヒューイッド John Hewitt さんも、奥様が同じ研究者で、学部で行動遺伝学の授業も受け持っていらっしやいました。ここの名簿を見ると、ほかにもそのようなカップル研究者が数組いるようです。また同じクラスをとっていた大学院生のクリスティーは、最近おなじ行動遺伝学を研究しているポスドクの男性と結婚しました。夫婦関係ではありませんが、これも先にご紹介した元所長のデフリース博士の義理の息子さんのショーン Shaun は、IBG でプログラマーとして勤務しています。

行動遺伝学の領域では、IBG 以外にも夫婦の研究者が目立ちます。統計解析プログラム Mx の開発者でその名を知らぬものはいないヴァージニアのマイク・ニール Mike Neale は、数年前にやはり精力的な研究活動をしているヘルミン・マエス Hermine Maes と結婚、学会にはかならず可愛いお子さんを連れてきていますし、やはり有名で独特の風貌のアンドルー・ヒース Andrew Heath は、ついこの前、セントルイスのワシントン大学で同じ研究チームのパメラ・マドゥン Pamela Madden と結婚しました。

アメリカでは離婚率が高いと言います。実際こちらで知り合った人で、離婚したり再婚したりしているという方も少なくありません。しかし私の知る行動遺伝学者カップルは、概して仲



が良く、長い人生を円満に過ごしてきているケースもまれではないように見受けられます。

こういう状況を評して、行動遺伝学の世界は incestuous (近親相姦的) だ、という人もいます。この incestuous ということばには「排他的」という意味も含まれています。自分が従事している学問を自虐的に批判するつもりはないのですが、このことばはこの学問の特色を一部分、的確に形容しているかも知れません。行動遺伝学は、とくに 1980 年代以降、大規模なレジストリーに基づく代表性の高いサンプルによる安定した結果と、そのデータを解析する高度な統計手法の発展、そして分子生物学との結びつきなどで、いまや Nature や Science はじめ、心理学や遺伝学の領域でランキングの高い国際誌に、その論文が数多く掲載され、他の研究領域にも影響を及ぼすようになってきています。しかしながら、その学会員は世界全体でも 500 人程度と、きわめて小さな学会です (わが日本双生児研究学会も会員数は 150 人程度と小さいですが、行動遺伝学会は国際学会でその程度なのです)。これはとりまなおさず、それだけ大きな双生児データをもち、それを解析するための統計的、分子生物学的手法を駆使できる研究チームでなければ、この研究領域に参入することすらできないからです。いま世界各国で、大規模な双生児レジストリー作りが行われようとしているのも、最初の「仕込み」ができれば研究が始まらないからですが、その組織力や経済力がない人たちから見れば、双生児研究の世界は「排他的」に見えることでしょう。



しかし行動遺伝学が「排他的」というのは、単にそのような「物量」レベルの敷居の高さだけではなく、その理論的閉鎖性にも問題があると思われます。行動遺伝学が主として問題にするのは、集団の中の遺伝的バリエーション (個人差) です。つまり、行動の個人差に及ぼす遺伝的な個人差の影響力を、環境の影響を統制して浮き彫りにすることです。しかしながら、それはあくまでも人間の行動も量的遺伝学の理論で説明できるぞ、あるいは最近の分子生物学と結びつけたとしても、それはこんな特定の遺伝子と関係しそうだぞ、ということを示したにすぎず、こうした研究で明らかになったことが、隣接し、潜在的に密接な関係があるはずの他の研究分野、たとえば脳神経科学とか進化心理学、そして認知心理学やパーソナリティ心理学、さらに発達・教育・社会心理学などのさまざまな理論とどのように結びつくかを積極的に問う努力がなされていないように思われます。行動遺伝学は、基本的に探索的色彩の強い学問で、反面驚くほど理論駆動力が乏しい学問のように思われます。探索のための方法論は提供しますが、独自の理論がありません。私と大木秀一先生 (大木先生ご夫妻は 9 月にボウルダーを訪れてくださいました) とでかつて訳したロバート・プロミン Robert Plomin の『遺伝と環境—人間行動遺伝学入門』の「序」で、彼が「将来、もっともよい行動遺伝学研究をするのは、行動遺伝学研究者ではなく、別の分野に行動遺伝学の手法を当てはめる人だろう」といったのも、そうしたアンバランスさがあるからでしょう (そういえばプロミンの奥さんは有名な発達心理学者のジュディ・ダン Judy Dunn。二人で家庭環境と遺伝との関係に関する本も書いています。このように夫婦が少しずれた研究領域で協力しあうと、もっと生産的なのかも知れませんね)。

そんななかで、自分自身が何ができるかはわかりませんが、自分なりのチャレンジとして、行動遺伝学を進化心理学とパーソナリティ心理学と結びつけるきっかけを、この留学中につかもうと努力しました。といっても、これは自分だけの力でできたわけではなく、多くの若い人たちの協力があつてのことです。一つは、進化心理学者ご夫妻として世界的に著名なジョン・トゥー

ビーJohn Tooby とレダ・コスミデス Leda Cosmides のいるカリフォルニア大学サンタ・バーバラ校に留学中の、東京大学の平石氏のお誘いで、この二人の前で話をさせてもらうという貴重な機会を作ってもらいました。これはパーソナリティの遺伝的個人差が進化的に意味があるのかなのか、というテーマです。ここには行動遺伝学者としても著名で日本通でもあるナンシー・シーガル Nancy Segal さんにも来ていただき、大変有意義なディスカッションができたと思います（写真）。その内容についてはここでは立ち入りませんが、今度の1月の双生児研究会学術講演会で、東大の山形君がそれに絡む発表をしてくれるはずです。進化心理学との関係は、同じく東大の千住君の自閉症傾向の研究でも触れられると思います。

最後に、コロラドでの双生児研究プロジェクトについて、簡単にお話をしたいと思います。我ながら迂闊だったのですが、こちらに来て 10 ヶ月あまり、日本から持ち越していた原稿や目先の論文を完成させること（あとは、あちこち遊び歩くこと？）にあくせくし、せっかくここに滞在したからできる、実際のここでの双生児研究プロジェクトの有様についての情報を得るのを怠っていました。帰国が頭にちらつくようになって、これではいけないと、ようやくつい最近になって、こちらで実際にデータを取る様子などを観察させてもらうようになったのです。



サンタバーバラにて
(一番奥がトゥービー、右回りに一人置いてシーガル、平石、
左に行ってコスミデス、そして安藤)

といいましても、ここでの双生児研究の全貌はとてもお話しできません。研究所のホームページ (<http://ibgwww.colorado.edu/> ここには先にご紹介した研究者の一覧もあります) の双生児研究のサイト (<http://ibgwww.colorado.edu/twinsites.html>) を見るとおわかりのように、Longitudinal Twin Study (LTS), Colorado Reading Project (CRP), Longitudinal Twin Study of Reading Disability (LTSRD) など7つもの双生児研究プロジェクトが独立に実施されており、ここにいる研究者に聞いても、他は何をやっているのかよくわかっていないほどの規模なのです。そしてそのうちの一つ、LTSRDでの双生児の調査の様子を見せていただく機会を得て、初めて私の研究室のある建物以外に、たくさんの実験室とたくさんのリサーチアシスタントがいる別の研究棟の存在を知りました。ここはそのような双生児研究のための調査員としてのアシスタントが20人ほど常時仕事をしています。この双生児プロジェクトの多くは縦断研究ですので、中には10年以上も勤めている人もいます。

私の見学した読みと数学能力のテストは、まるまる一日がかりの個別調査です。週末、両親と連れ添って研究室を訪れたふたごは、親に対する説明と写真撮影、そしてつむじや目の色などのチェックのあと、午前・午後、それぞれ3時間の計6時間にわたり、それぞれ別々の部屋で個別検査を受けます。このときはしていませんでしたが、つい最近まで、そのテスト場面はすべてビデオ録画していたようで、別の部屋には膨大な数のビデオが保存されていました。個別検査は、おきまりの「二人はどれくらい他の人から間違えられるか」についての質問や、利き手に関する質問などに始まり、読みや数学のテスト、そしてfull-scaleのWISC-R知能検査へと進みます。私が見たのは11歳の二卵性双生児の男の子で、とても人なつこく、特に一人の子はテストの合間合間に、私に向かって、この答えでいいのかな、とうかがうような視線を向けてくれました。短い昼食のあとは、今度はメインキャンパスの心理学部棟にあるコンピュータでの読み能力の検査に移り、何百問というテスト項目に答えていきます。

このような手間暇かけた個別調査を何人ものアシスタントが一日一組ずつ、そのつど親に説明をしながら週末ごとに行い、そうして何百組もの双生児のデータを集めていくのです。こうした気の遠くなるような「仕込み」のプロセスは、私がやはり共同研究をしているオーストラリア・ブリスベーンのクイーンズランド医学研究所(マーチン Nick Martin さんの研究所)の双生児調査でも同様です。それにかかる人手と研究費があつてこそその研究体制であり、そのようなプロジェクトが別々に7つも走っているのかと思うと、われわれ日本人の双生児研究がこのような人たちと互角に張り合えるのだろうかと思ふと悲観的にすらなります。もちろん研究の質は物量だけで決まるわけではありませんが、やはりわが国の双生児研究の体制については、学会をあげて協力しあい、小手先だけでごまかさない質の高いシステムを時間を掛けて築き上げる努力をしなければいけないと痛感させられました。

わが国でも双生児研究者どうしが結婚し、一生かけて地道に研究体制を育てていくような、閉鎖的でない *incentous* な風土が必要なのかも知れません(天羽先生がまさにその見本ですね)。



平成15年度 日本双生児研究学会 第3回幹事会議事録

日時： 平成15年度(2003年)11月15日(土) 16:00-17:30

場所： 慶応大学三田キャンパス西校舎513教室

出席者： 浅香昭雄、天羽幸子、今泉洋子、大木秀一、小野寺勉、杉浦祐子、
又吉國雄、鎌倉利光(事務局代理)

欠席者： 安藤寿康、岡崎祐士、加藤則子、末原則幸、野中浩一、早川和生、
吉田啓治

議題：

1. 日本双生児研究学会規約の変更について

ア. 第5条[会員] 会員は個人会員をもって構成し、年会費として、3,000円を前納するものとする。→

第5条[会員] 会員は個人会員、機関会員とする。個人会員は名誉会員および普通会員とする。年会費は別に定めるものとする。名誉会員は総会の承認を経て会長が委嘱する。

イ. 付記(2)の3. 変更について

(2) 幹事選挙施行規則

3. 選挙人および被選挙人は、投票年の前年10月31日に会員である者に限る→

3. 選挙人および被選挙人は、投票年・投票月の2カ月前に会員である者に限る

2. 名誉会員推薦に関する申し合わせ事項は以下の通りである。

1. 大会会長など本学会に対する貢献が大である事。
2. 引き続き現在まで、本学会会員である事。
3. 名誉会員の資格年齢は概ね70歳以上とする。
4. 名誉会員は幹事会の推薦にもとづき、総会に諮る。
5. 名誉会員は総会の承認を経て会長が委嘱する。名誉会員の会費は徴収しない。
6. 幹事が名誉会員に推薦され、受諾する場合は、幹事を辞退するものとする。
7. 名誉会員の推薦については、毎年度、幹事会の議事とする。

3. 選挙の開票結果について

大木幹事より選挙結果が以下のように報告された。

投票者数 50人、無効投票数 0票であった。

選挙開票結果から、以下の9名が幹事として当選した。

浅香昭雄、安藤寿康、今泉洋子、大木秀一、加藤則子、野中浩一、早川和生、
又吉國雄、横山美江 以上。

また、会長推薦幹事として、小野寺勉、杉浦祐子、志村恵会員が追加された。

なお、天羽幸子会員は当選したが辞退された。

これに関連し、次回幹事選挙より、被選挙人に該当しない場合(名誉会員等)を明記することが申し送り事項とされた。

4. 名誉会員の推薦

馬場一雄、天羽幸子、吉田啓治会員が名誉会員として推薦された。

5. 会費の納入状況と会員数について

平成12年度以降、会費を納入している会員数は現時点で149名である。

6. 第18回学術講演会の準備状況

天羽幹事からプログラムの概要説明が行われた。

7. 会員名簿の最新版発行について

今後、名簿に掲載する事項等を確認するお知らせを全会員に通達し、発行していく予定。

8. 12月のニューズレター原稿について
11月中に原稿を回収し12月15日に発送予定である旨、大木幹事から説明が行われた。
9. 会員数の拡大について
産婦人科領域の会員を増やしたい旨を又吉幹事をお願いした。
10. 11月15日の研究会の参加人数は31名であった。
11. 次回の研究会（第19回）の予定
又吉國雄会員が講師として決定した。
期日は来年の5月頃、場所は慶応大学（三田校舎）の予定。



第11回国際双生児研究学会 (The 11th International Congress on Twin Studies (ICTS)) 開催のお知らせ

日時：2004年 7月 2-4日

場所：サザンデンマーク大学，オゼンセ（デンマーク）

☆ 演題抄録の締め切りは2004年2月15日です。

これに前後して、7月1日にデンマーク双生児登録の50周年シンポジウム、7月5日にGENOMEUTWIN計画のワークショップが開催されます。

また、7月3日,4日にはNordic Twinnet の企画によるTwins' Festivalが開催されます。

さらなる情報と登録に関しては下記を御参照下さい。

*ICTSに先だってBGA（国際行動遺伝学会）のAnnual Meeting が6月27-30日にフランスのAix-en-Provenceで開催されます。こちらにも多数の双生児研究者が出席すると思われるので関心のある方はチェックして下さい。



11th International Congress on Twin Studies
2 – 4 July 2004
Odense – the city of H. C. Andersen, Denmark

<http://www.icts2004.sdu.dk>

BGA Annual Meeting
27– 30 June 2004
Aix-en-Provence, France

<http://www.bga.org/meetings/2004/>

次回研究会のお知らせ

日時、場所、題名は今の段階では未定です。
詳細が決まりましたらお知らせ致します。

2004年 5月頃

慶應義塾大学三田キャンパスの予定

又吉國雄氏（東京医科大学霞ヶ浦病院産婦人科）

編集後記

◆ 11月15日は、慶應義塾大学で双生児研究会がありました。多胎児サークルの代表者の方々も多くのご参加があったそうです。私自身はちょうど当日鹿児島で学会発表をしていたため参加できず残念でした。横山先生がご研究の成果を発表されたのですが、とても意義深いものと思います。

多胎児の育児支援の上でニーズを把握することは不可欠ですが、常日頃きかれる声も数字としてまとまっていないと、政策としてなかなか生かしてもらえません。横山先生はこういう問題についてきちっと数字を残してくださいますので、大変参考になるわけです。

とはいえ行政支援の現状は「焼け石に水」。あきらめずに知恵をだしあいましょう。

（加藤則子 kato@niph.go.jp）

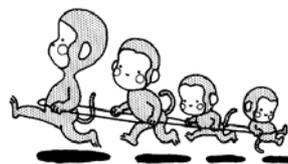


◆ 来年1月には、東京で双生児学会の学術総会があります。一人でも多くの方のご参加で盛会にしましょう。また、7月には国際双生児学会がデンマークのオゼンセで開催されます。

今回で編集担当を交代する事になりました。このニュースレター全34号のうち実に24号分の編集に関してきました。これは少々長すぎたかなと思っています。やはりニュースレターがマンネリ化して来た事は否定出来ません。今でこそほとんどの原稿がメールとスキャナーで片付く世界ですが、初期の頃は文書ファイルと言っても5インチフロッピーでのやり取りが主流でしたし、有名なツインタワーの写真を掲載するために切り貼りして印刷してみたり、今とは比較にならないほど画質の悪い（しかも高価な）スキャナーを購入してみたり、いろいろな苦勞がありました。この間に編集をご一緒した先生も、松井一郎先生、今泉洋子会長、野中浩一先生、浅香昭雄先生、安藤寿康先生、加藤則子先生と変わってきました。皆様どうもありがとうございました。装いも新たになる次号にご期待下さい。何とか年内に発行出来てほっとしています。

恒例ですが、来年が皆様にとって良い年になりますことをお祈りいたします。

（大木秀一 sooki@kj8.so-net.ne.jp）



ニュースレター

日本双生児研究学会 発行

編集：ニュースレター編集委員会（責任者：加藤則子・大木秀一）